

# 大学体育スポーツ学の体系化へ向けたアカデミック・ポートフォリオ：教育—研究—サービス活動の省察と今後の展望

木内敦詞<sup>1)</sup>

## Academic portfolio toward the systematization of university physical education and sport studies: Reflection on teaching-research-service activities and future prospects

Atsushi KIUCHI<sup>1)</sup>

### はじめに

本稿は、2024年9月10日～12日開催の第24回大阪公立大学高専アカデミック・ポートフォリオ (Academic Portfolio: AP) 作成ワークショップにおいて、オンライン参加した著者が作成したAPを掲載するものである。教員が振り返る範囲は、ティーチング・ポートフォリオ (Teaching Portfolio: TP) では教育に限定されるが、APでは研究やサービス (管理運営・社会貢献) も含めた大学教員の活動全体へ広がる。そのため、TP作成を経験した上でAP作成が可能となる。APでは教育・研究・サービス (管理運営・社会貢献) を独立して記述するだけでなく、「統合」の項において各々の寄与について考察し、教員としてのコアを見出すことをめざす (栗田, 2024)。

### 1. 序論

このAPの目的は、これまで大学教員として何をなぜどのように行動してきたのかを振り返

り、その根っこにある自身の生き方に自覚的になることで、7年後に迫る定年時のやり残しを少しでも減らすことであろうか。あるいは、栗田佳代子先生の言葉を借りれば、「活動の軌跡を、価値あるカタチに (栗田, 2024)」することを大学体育スポーツの領域へ普及させるため、私がAPを書いて公表し、恥をさらすことであろうか。ティーチング・ポートフォリオ (TP) 執筆後2年が経過した今、教育—研究—サービス (管理運営・社会貢献) を統合したAPをまとめるいいタイミングのように思う。

私が体育スポーツの世界に足を踏み入れるきっかけとなったのは、高校三年の夏に地元・奈良の本屋で立ち読みした受験情報誌の記事である。特集「大学びっくり研究：運動生理学のスミぐあい」(旺文社, 1984)には、筑波大、順天堂大、日本体育大、大阪体育大での運動生理学研究が紹介されていた。なかでも、筑波大の勝田茂先生による骨格筋線維組成に関する研究がひときわ輝いていた。当時の私は体育学部を持つ大学の存在は知っていたものの、体育学

---

1) 筑波大学体育系

Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

部が体育スポーツ活動を研究対象としていることを知らなかったし、筋線維組成によって種目適性があるなんてことにも驚いた。その雑誌購入後は記事を読み返し、あまりの興奮で朝まで寝られなかったのを覚えている。翌朝の食卓で両親に、筑波大の体育専門学群への進学意志を伝えた。どんな学部に進学するかをぼんやりとしか考えていなかった私にとって、受験雑誌にたまたま掲載された記事を本屋でたまたま手にして立ち読みしたこと、運動生理学という研究領域の存在を知ったことが、私の人生の大きな分岐点となった。

2つ目の分岐点は、30代半ばでの大学体育授業研究へのシフトである。学部3年から修士2年までの4年間、念願かなって勝田研究室で卒論・修論研究に取り組んだものの、生理学研究への熱が年々醒めていく自分に気づいていた。大阪工業大・助手の職を得た1991年の大学設置基準大綱化により、それまで4単位必修であった体育科目を選択化する大学が大勢を占めた。この時の大学体育存続への危機感が、10年後の大学体育授業研究に本腰を入れることになった理由であることは間違いない。しかし、危機感だけが私を動かしたわけではない。大学の上司であり同僚で、学生時代の勝田研の先輩でもある中村友浩先生（現・大阪工業大・教授）、そして2003年から4年間、嘱託講師として勤務いただいた荒井弘和先生（現・法政大・教授）と3人で授業改善を軸とした実践研究に取り組んだあの時期は、社会人以降の青春時代であった。この授業実践研究をとおして2011年、九州大の橋本公雄先生ご指導の下、博士（教育学）の学位を44歳で取得したことが、次の分岐点に繋がった。

その3つ目の分岐点は、23年間勤めた大阪工業大から筑波大への異動（2014年）である。筑波大と鹿屋体育大による「大学体育教員の養成と高度化」を目的とした博士課程の開設に向けた新規採用人事で、大学体育授業の実践研究で学位を取得した実績が評価された形である。

自らの担当する体育授業の改善を意図した実践研究を行うことで教育と研究が繋がり、その成果としての博士の学位取得が筑波大での採用に繋がり、実践を研究たらしめる力を持つ学生を育てる博士課程を担当することは、「大学体育スポーツ学」とでもいべき研究領域構築へと繋がると考えている。このことは、大学体育スポーツに関するFDと学術の発展を担う（公社）全国大学体育連合の活動へも直結する。これらを通じて、私の教育—研究—サービスの相互循環と統合がなされていることを、本AP作成を通して実感することができた。

## 2. 教育

### 2-1 教育の責任

2024年現在、私の教育の責任として位置づけられるものは以下のとおりである。①共通科目「体育」の授業担当と授業運営（体育スポーツ局・体育部局・大学体育部門長）、②体育専門学群生（学士課程）の卒論研究指導、③体育学学位プログラム（修士課程）の授業担当と修論研究指導、④大学体育スポーツ高度化共同専攻（博士課程）の授業担当と博論研究指導、⑤硬式野球部の顧問（部長）。このように、学士／修士／博士の各課程の教育・研究に関わっているが、本TPでは学士課程における共通科目「体育」、いわゆる「教養体育／一般体育／大学体育」として開講される授業のうち、2024年春に担当したソフトボール授業の教育実践について記載する。

### 2-2 教育の理念

現時点での私の教育理念は「文武徳三道」という言葉に集約できる（資料1、木内、2024）。文へも武へも徳をもって取り組む青年になってほしい。具体的には、「誰もが全員で、スポーツを楽しみ、スポーツで考え、スポーツで成長できる、社会の縮図を体験できる場となる授業」を実現したい。

### 2-3 授業の目標と方法

めざす体育授業像「誰もが全力で接戦を楽しめるソフトボールゲーム」の実現に向けて、以下の具体的な方法で授業を展開している。初回授業におけるオリエンテーション配布資料（資料2）。を示しながら、授業の概要（到達目標、予定、方法、評価、服装、欠席の取扱いなど）を説明している。

- 1) 「各回の授業での学び」や「学期を通じた自己成長」をレポート
- 2) 人と人の繋がりを重視し、班内・チーム内で話し合いの場を設定
- 3) ゲームでのドキドキ／ワクワク感を重視するためのルール修正や班編成（資料3）
- 4) 運動技能の優劣によらず全力で挑戦できる条件の設定
- 5) 独自の特徴的な方法や方針
  - ・正式ルールにとられないグラウンド設定（フェアゾーンの縮小）
  - ・習熟段階に応じた用具の選定（ボール、バッ

- ト、ネット）
- ・安全第一の設定（投手前の防球ネット、大判ベース、ルール）
- ・雨天時の体育館内でのガチンコのティーボールゲーム（公式記録あり）
- ・授業中の歩数計測
- ・養生テープの名札装着
- ・成績評価の観点と評価材料
- ・（2023 秋から新規）毎回の授業の振り返りで、タスクワークとチームワークの双方への視点を協調：チームワークの構成要素（コミュニケーション、チーム志向、バックアップ、モニタリング、リーダーシップ：資料3）を指定し、当日の授業の経験に関連づけて省察
- ・省察の枠組みの提示（Good-Chat-Next. 活動／経験／感情とその時の自身の考えや言動の是非と根拠を分析評価し、その日の学びや気づきを述べ、来週の自分への言葉を残す）

### 資料1 教育理念の概要（木内，2024）



資料2 初回授業におけるオリエンテーション配布資料

2024春 基礎体育(ソフトボール:木内敦詞) オリテ資料		火3 (生物・地球・数学・物理・化学・創成・医学・看護・医療・芸術・総合3,4組)			
到達目標	(1) チームワークを高め、仲間とともに課題や目標に挑戦できる。 (2) 誰もが全力で接戦を安全に楽しめるゲームとなるよう、知恵を絞り、実践できる。 (3) よい体調で体育授業に臨めるよう、日常生活でのセルフケア能力を獲得する。				
学位PGコンピテンシーとの関係	「心身の健康と人間性・倫理性」, 「協働性・主体性・自律性」				
キーワード	コミュニケーション、チャレンジ、技術、スポーツマンシップ、実践力、 <b>タスクW/チームW</b>				
チーム内の個人が取り組む活動を、タスクワークとチームワークに大別	タスクワークは、課題そのものが要求する活動であり、スポーツでのパフォーマンスそのものをさす。		チームワークは、他のメンバーとの情報交換や相互援助などの対人的な活動のすべてを指す。特定のチームに限定されない「個人の」チームワーク能力をここではいう。		タスクW/チームWの に関する省察が毎回の 授業レポ
予定	①	授業設計の理解、人馴れ、球慣れ	ガイダンス、班わけ、キャッチボール		
	②③	球感覚の獲得、ミニゲームを通じた基本ルールの体得	ドリル、6人班対抗ミニゲーム		
	④⑤⑥	慢速塁球でトライアルゲーム	ドリルとフルゲーム		
	⑦⑧⑨⑩	慢速塁球のクライマックスゲーム	試合前ノックとフルゲーム		
	雨天時→ 球技体育館南面(玄関入左側コート)でドリルやゲーム。manabaコースニュースで通知				
方法	慢速塁球	学校体育3号球/Tボール	投手前防球ネット	1塁ダブルベース	23塁大判ベース
	ドリル継続	6-7人×6班編成	ミニゲーム	助人体験	名札装着
	ミーティング	ルール調整	学びの記録	大福帳	歩数記録
評価	知識・理解 30%	: a.日常レポート20		d.ルール体得10	
	技能→活動 35%	: b.授業内歩数30		e.最終レポート5	
	態度・意欲 35%	: c.体験記録30		e.最終レポート5	
毎週のミニレポート	日常レポート20	a.どのようなコンディションで授業当日を迎えたかを5段階評価。2点×10週。体調、やる気、睡眠、食欲、気分について。学期を通じた課題なので、欠席者も提出可能			
	授業レポート60	b.授業内歩数3.0点×10回、c.体験記録3.0点×10回→出席しないと獲得できない 授業内歩数と、授業でのタスクW/チームWに関する振り返り(Good-Chat-Next)を、授業翌日正午までにmanaba入力(100-200字)。6点×10回			
	ルール体得10	d.基礎的なルール(フォースアウト、タッチアウト、タッチアップ)理解やプレイ選択			
	最終レポート10	e.春学期全体の学びの振り返りとなるレポート			
服装	スポーツ活動に適した服装とシューズを着用のこと。館内靴も用意のこと				
欠席の扱い	学校指定感染症への罹患やその疑いのある場合、公式行事参加の場合、二親等以内の忌引、就職面接などは、公欠扱いとする。ただし、それを証明する何らかの書類が提出された場合に限る。たとえば、診断書でなくても本人名記載の検査結果や処方箋、試合の開催予定とクラブ名簿、葬儀等の通知書類と関係性の説明、就職面接の通知メール、などが考えられる。公欠扱いと教員が判断した場合、以下のよう に成績を調整する。1回公欠→総合点を10/9倍。2回公欠→総合点を10/8倍。その他、不明な点は、担当教員に相談のこと。遅刻は減点 対象なので、累積すると痛目に遭う可能性あり。成績評価の対象となるためには、開講回数の2/3以上の出席が必要。				
受講期間中の怪我	実技活動を遂行できないようなケガを授業時間外で負った場合、授業当日に申し出るのではなく極力早急に、教員までメール連絡のこと kiuchi.atsushi.fw@u.tsukuba.ac.jp				
TWINS登録, manaba設定	・TWINS未登録者は今日中に登録を済ませること ・manabariマインダ受信設定(コースニュース, 新規課題告知, 掲示板)をオンにすること。				
班	メンバーリスト(学類と氏名)				

資料3 初回授業における調査票

2024春 ソフトボール(木内) 初回授業調査票							
①過去の運動歴	各項目で該当する時期の数字全て囲んでから、右側の四角に、最大の数字を記入してください	小学	中学	高校	大学	↓最大の数字	
	塁球/野球の経験アリ	11	14	17	20	A	
	塁球/野球以外の打具スポーツの経験アリ	7	10	13	15		
	打具スポーツ以外の球技の経験アリ	4	7	10	13		
	球技以外のスポーツの経験アリ	3	4	7	10		
	運動部等の経験ナシ	2	2	2	2		
↑での「経験」は、「部活動やクラブチームに1年以上所属した経験」とします。							
男女共修体育における ②塁球授業でのプレイの自信	3項目各々で、1～5のいずれかを囲んでから、右側の四角に選んだ数字の合計を記入してください。	小	中	大	数字の合計↓	あいいう合計	
	塁球授業での <b>打球</b> の自信	1	2	3	4	5	B
	塁球授業での <b>捕球</b> の自信	1	2	3	4	5	
	塁球授業での <b>送球</b> の自信	1	2	3	4	5	
男女共修体育における ③体力要素	3項目各々で、1～5のいずれかを囲んでから、右側の四角に選んだ数字の合計を記入してください。	No			Yes	数字の合計↓	
	馬力(パワー)はあるほうだ	1	2	3	4	5	い
	足は速いほうだ	1	2	3	4	5	
	大きな声を出せるほうだ	1	2	3	4	5	
④塁球/野球のルール理解度	3項目各々で、1～5のいずれかを囲んでから、右側の四角に選んだ数字の合計を記入してください。	聞いたことが もない	聞いたことは ある		人に説明 できる	数字の合計↓	
	タッチアウト	1	2	3	4	5	う
	フォースアウト	1	2	3	4	5	
	タッチアップ	1	2	3	4	5	
⑤個人のチームワーク能力	5項目各々の能力について、あなたの当てはまる程度を1～6から選んで囲む	まったく 当てはま らない	どちらかという と 当てはま らない	どちらかという と 当てはま る	非常によく 当てはま る	数字の合計↓	
	メンバーとの関係を形成し維持するために、自らの意思を他のメンバーに的確に記号化し、他のメンバーの意思を適切に解読する能力がある	1	2	3	4	5	C
	自分がチームに属することを重要と考えて個人の目標よりもチームの目標を優先させて、他のメンバーとの対立を避けて調和を重視する能力がある	1	2	3	4	5	
	他のメンバーを励ます情緒的サポートや、実助的助言や助力を提供する道具的サポートなどを提供する能力がある	1	2	3	4	5	
	チームが置かれている状況を把握し、他のメンバーの様子を観察し、それに対する自分の行動を確認して、状況に応じて調整していく能力がある	1	2	3	4	5	
	メンバー同士の相互作用を促したりチームの目標を達成したりするよう他のメンバーに働きかける能力がある	1	2	3	4	5	
⑥この授業の選択理由 (他の種目がある中で、なぜ塁球を選んだか? この授業で何をしたいか? どんな自分になりたいか?)						ABCの合計↓	
⑦心身の健康等に関する事で、教員に把握してほしいこと(守秘義務を守りますので安心して記入してください)							
⑧得意なこと、好きなこと/もの							
しめい 氏名				⑨出身県	⑩似顔絵(ぜひっ!)		
		学類					
○で囲む→	月3	月4	火3	班			

## 2-4 成果と評価

### 1) 2年前のTP作成後に実現できたこと

- ・筑波大学体育センター紀要「大学体育研究」に作成したTPを掲載した(木内, 2024)。
- ・それを見た研究仲間の難波秀行先生(大阪大学)がTPに興味を示し、このTPWSに参加した。

### 2) 授業アンケート

全学共通のアンケート4項目に加え、体育センター設定35項目の合計39の質問を、学期終了時期に行っている。その結果を体育センターの教育目標5項目に照らして集計した結果は資料4のとおりであった。全学共通の4つの設問では、5点満点で4.53点であった。共通体育独自設定の35の設問(6点満点)では、「学生自身の意欲」5.42点、「授業の計画や運営」5.25点、「授業の指導法」5.45点、「筑波体育の教育目標の達成度」5.05点であった。これらの評価値は、コロナ前の2019春よりも低かった。受講学生の学年別にみると、1年次の評価が高く、3年次の評価が低いことが明確であった。3年次の授業が、今学期は10回中4回、雨天の影響で体育館での授業であったことが影響しているのかもしれない。あるいは、現行の授業が1年生向けの授業であり、高年次学生への対応が必要なのかもしれない。

### 3) 質問紙調査

1) 大学初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度(PBS-FYPE: 西田ほか, 2016)で大学体育授業における学び5因子を、2) 大学体育実技経験評価尺度(島本・石井, 2007)でライフスキル獲得に寄与する体育授業での経験4因子を、それぞれ評価した(資料5)。2022春実施の同尺度調査と比較した結果、2年前と同様に、すべての下位因子において、先行研究で示される尺度基準値よりも高い得点であった。私の授業の特徴としては、「共同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上」や、「他者との協力」といった経験を積むことができるといえるだろう。

### 4) 技能・体力・ルール理解度およびチームワーク能力の変化

ソフトボールの技能に関する自信、体力に関する自信、基礎ルールに関する自信、そして個人のチームワーク能力(相川ほか, 2012)について、初回授業と最終回授業で行った調査票(資料3の②③④⑤)の結果を資料6に示す。統計処理未実施ながらも、技能、体力、ルール理解、そしてチームワーク能力について、多くの下位項目で受講の前後で改善がみられた。とくにチームワーク能力については、今後、実践研究へと発展できるテーマとしての手応えを感じている。

### 5) めざす授業像「誰もが全力で接戦を楽しむソフトボール」への到達度

質問紙調査の最後に、この授業でめざした「誰もが全力で接戦を楽しめるソフトボール授業」への達成度について、受講者自身と授業全体の2つの視点から5段階で回答を求めた(1まったくあてはまらない、2あてはまらない、3どちらともいえない、4あてはまる、5よくあてはまる)。その結果、受講者自身は $4.62 \pm 0.67$ 、授業全体は $4.72 \pm 0.46$ であり、めざす授業像へは高い水準で到達していたものと考えられる(2022春調査データ: 木内, 2024)。とはいえ、以下に示すTAや授業参観者からのコメントのように、授業改善の余地は十分に残されている。

### 6) TA 院生からのコメント

2024春におけるティーチング・アシスタント(TA)の大学院生1名から、当授業の「評価できる点/改善を要する点」の双方についてコメントを求めた。

評価できる点として以下のコメントを得た。授業回数を重ねるにつれて学生同士で主にバッティングについて教えあうようになっており、グループ内で良い循環が生まれていた。打撃面では、全体的に空振りの数が減ってボールにコンタクトできる確率が上がり、長打を打つ学生が増えていた。また、守備面ではゲーム前に行

## 資料4 授業アンケートの集計結果

	2024春			2019春
	1年次 N=35	3年次 N=65	全体 N=100	1年次 N=40
全学共通の設問：4問（5点満点）	4.80	4.45	4.53	4.78
教員による授業の準備は十分にされていたか	4.91	4.60	4.66	4.9
教員の説明や授業の進め方は適切だったか	4.82	4.40	4.50	4.7
授業を通じて、この科目に関連する分野への興味や関心が高まったか	4.62	4.43	4.45	4.7
総合的に判断して、この授業を受講してよかったと思うか	4.85	4.38	4.50	4.8
共通科目「体育」独自の設問：35問（6点満点）	5.46	5.10	5.18	5.39
【学生自身の取組：2問】授業への出席状況、授業へ取り組む態度	5.75	5.33	5.42	5.6
【授業の計画や運営：7問】学習目標の明確さ、授業と学生の関心の対応、シラバスを含めた授業の計画性、テーマ内容の適切性、授業の流れや時間配分、成績評価基準の明示、施設や用具	5.54	5.18	5.25	5.5
【授業の指導法：6問】教員の知識と専門性、理解しやすい指導、授業運営の工夫、熱意ある指導、学生とのコミュニケーション、学生の体力/技術水準を考慮した授業展開	5.73	5.39	5.45	5.6
【「筑波体育」5つの教育目標の達成度：20問】	5.32	4.98	5.05	5.26
①健康・体力およびスポーツ技術に関する基礎的知識や思考力・実践力の養成：4問	5.45	5.09	5.16	5.4
②豊かな心と社会性（コミュニケーション力、リーダーシップ等）の醸成：4問	5.51	5.12	5.20	5.5
③逞しい精神、高い倫理観の育成：4問	5.24	4.98	4.96	5.2
④スポーツ文化の知的解釈力・鑑賞力の涵養：4問	5.15	4.90	4.93	5.1
⑤自立的に自己を成長させ続ける力の涵養：4問	5.26	4.90	4.98	5.1
note：授業アンケート回答率は、1年次で35/38=92%、3年次で65/81=80%、全体で100/119=84%であった。				
全学共通の設問における5段階評価は、大いにそう思う5点、そう思う4点、どちらとも言えない3点、そう思わない2点、全くそう思わない1点				
共通科目「体育」独自の設問における6段階評価は、とても6点～まったく1点				
10週授業のうち雨天のため室内での授業となったのは、1年次1回、3年次4回であった。				

## 資料5 主観的恩恵と体育実技経験に関する尺度評価

	2024春1年次 N=38	基準値	基準値 との差異	2022春1年次 N=39
大学体育授業の主観的恩恵評価尺度（西田ほか，2016）				
運動スキル・練習方法の習得	34.21±4.47	27.76±6.59	+23%	33.2±4.1
協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上	37.71±3.32	29.74±6.53	+27%	37.6±3.1
ストレス対処とポジティブ感情の喚起	23.39±4.65	20.45±4.98	+14%	24.5±3.1
体力・身体活動の増強	31.74±4.81	25.80±6.61	+23%	31.3±4.8
規則正しい生活習慣の確立	15.34±3.10	13.20±3.54	+16%	13.9±4.6
全体得点	142.39±16.3	116.96±23.5	+22%	140.5±14.6
大学体育実技経験評価尺度（島本・石井，2007）				
自己開示	11.95±2.72	10.2	+15%	11.8±2.7
他者協力	15.24±1.20	12.0	+27%	14.7±1.8
挑戦達成	8.50±2.33	8.0	+6%	9.0±2.5
楽しさ実感	10.79±1.36	9.5	+14%	10.4±1.5
全体得点	46.28±5.25	39.7	+17%	

うノックの成果からか、週を追うごとにゴロやフライを捕球できるようになったため、ゲーム中に併殺を期待するような状況も発生するようになっていた。

改善を要する点として以下のコメントを得

た。守備時に状況に応じた動きができていないために失点するケースがあり、助言すれば頭ではわかっているようであった。対策として制約主導型ゲーム設定ができれば普段とは展開が変わり、学びや刺激になるように感じた。

資料6 技能・体力・ルール理解度およびチームワーク能力の変化 (N=81)

	初回	最終回
塁球の技能に関する自信 (5段階評価)		
打球	2.78±1.11	3.16±0.95
捕球	2.89±1.10	3.16±1.01
送球	2.84±1.05	2.94±0.94
体力に関する自信 (5段階評価)		
馬力	3.01±1.08	3.19±1.09
走力	2.77±0.99	3.11±1.04
声量	3.22±1.12	3.56±1.01
塁球の基礎ルールの理解度 (5段階評価)		
タッチアウト	3.56±1.36	4.62±0.60
フォースアウト	2.58±1.60	4.42±0.89
タッチアップ	3.10±1.55	4.51±0.69
個人のチームワーク能力 (相川ほか, 2012) (6段階評価)		
コミュニケーション能力	4.01±0.98	4.46±0.96
チーム志向能力	4.35±0.74	4.90±0.73
バックアップ能力	3.80±0.99	4.56±1.08
モニタリング能力	4.14±0.89	4.44±1.00
リーダーシップ能力	3.59±1.05	4.32±0.97
全体得点	19.89±3.66	22.68±3.86

以上のように、TA 大学院生からは、技能上達に関する具体的な視点からのコメントをもらうことができた。とくに「制約主導型」という画期的な提案が私にとっては大きかった。ソフトボールにおける具体的な状況として説明すると、「走者1塁から攻撃が始まるよう設定することで、内野ゴロを打つだけで併殺の動きが必要になったり、走者がいることで一塁以外の場所でアウトを取るための動きをするようになることが狙いのゲーム」ということになる。今年度秋学期から早速、制約主導型ゲームをいくつか設定し、技術的・戦術的な上達を図りたい。

ただ、私の体育授業の主眼は、受講生の心理社会的側面の成長にあるにもかかわらず、TA 学生からのコメントが技能的な側面に偏ったものであったことは、私の授業の狙いがTA 学生に伝わっていない可能性を意味するものとも捉えている。タスクワークとチームワークの双方の育成に効く大学体育ソフトボール授業を追求していきたい。

### 3. 研究

#### 3-1 研究の理念

Scholarship of Teaching and Learning (SoTL) ソートル：教授と学修の学識) の概念を初めて知ったのは、2020年のコロナ禍第一波の最中であつた。SoTLとは、「教授(教えること)と学修(学ぶこと)についての学術的探究をとおしてそれを改善しようとする試みやその成果として得られる知のこと(松下, 2011)」,あるいは「学者としての大学教員が教育を研究と同様に扱い、その成果を公表・批判・評価・利用すること(大山ほか, 2017)」とされる。教育と研究の結びつきを常に意識して実践してきた私の教育・研究の理念を、SoTLは整理整頓して代弁してくれているかのように感じた。

SoTLの概念に近い言葉を、大学体育に関する論文誌「大学体育学」創刊号(2004)の巻頭言で、当時の編集委員長であり全国大学体育連合理事長でもあつた杉山進氏が残している。「大学体育固有の領域(1.実技・演習・講義の授業, 2.保健管理センターなどと連携した学内での保健健康事業, 3.運動部やスポーツサークルなどの課外活動, 4.公開講座をはじめとした社会貢献など)の充実発展のためには、大学体育教員それぞれの特色ある実践的な取り組みが不可欠であり、そのための実践研究の蓄積がどうしても必要である。この教育研究論文誌の独自性はあくまで、大学体育の実践に結びつく内容のものであり、大学体育の充実発展に貢献する点にある。研究のための研究ではない」と。「大学体育学」は2019年から「大学体育スポーツ学研究」へ誌名変更されたものの、杉山氏の意志は確実に継承され、掲載論文数の増加とともに活気を帯びている。

#### 3-2 研究の特徴

本AP表紙掲載のAPチャートへ示すように、教育を「研究に生きる」実践の場、研究を「実践に生きる」研究の場として教育—研究の関

係を捉えている。少し大袈裟に言えば、「SoTLマインドの体現」をモットーにしてきたように思う。これまでの研究を公刊論文に基づいて4つに分類したところ、その比率は順に、1. 授業研究70%、2. 部活研究15%、3. 生理学研究10%、4. 野球研究5%であった。

【授業研究70%】2003-2013は健康教育系の授業研究が中心であったが、筑波大へ移動した2014年以降は大学体育全体に関する研究や、スポーツ教育系の授業研究が増えてきた。2020年以降はTPやAPへの興味関心が高まっている。

【部活研究15%】部活研究は、学位取得以降の2012年ころから開始し、学生アスリートのライフスキル獲得やキャリア成熟を促す要因に関する研究を行っている。2020-2024年度は科研費(基盤研究C)を獲得し、研究を進めている。

【生理学研究10%】骨粗鬆症の予防としての運動の役割等に関する生理学研究論文を1990-2006年を中心に発表しているが、授業研究への本格的な移行とともに、現在ではまったく行っていない。

【野球研究5%】走塁セルフ・エフィカシー尺度、大学野球選手の心理的競技能力、熟達捕手の配球戦術に関する論文を公刊してきた。今後は、研究指導した卒論学生の研究内容を、日本野球学会「野球科学研究」や、学内紀要へ投稿していきたい。

### 3-3 研究に対する他者からの評価

大学体育に関するFD活動や学術活動を推進する(公社)全国大学体育連合より、これまでに以下の賞を授与いただいた。①大学体育奨励賞(2004)大学教育学会誌25巻2号掲載論文「健康行動実践力の育成をめざした大学体育授業：授業時間内外の課題実践を用いて」の功績；②大学体育教育賞(2009)体育学研究53巻2号掲載論文「行動科学に基づく体育プログラムが大学新入生の健康度・生活習慣に及ぼす効果：Project FYPE」の功績；③大学体育優秀教員賞(2016)多年にわたり大学体育教員として教育・

研究に尽力した功績；④大学体育教育賞(2021)大学体育に長く携わりその発展に貢献した功績。

### 3-4 発表された成果の代表例

発表された成果の代表例として、以下の3つを挙げる。すべて授業研究に関するものである。

- 1) 日本体育学会「体育学研究」誌への論文掲載  
・木内ほか(2008)行動科学に基づく体育プログラムが大学新入生の健康度・生活習慣に及ぼす効果：Project FYPE. 体育学研究, 53: 329-341  
・木内ほか(2009)行動科学に基づく体育プログラムが大学新入生の身体活動関連変数に及ぼす効果：Project FYPE. 体育学研究, 54: 145-159.

1つ目の論文が、3-3-2)の受賞対象論文である。この受賞によって、「教育実践研究は紀要どまり」との大学体育関係者の持つ従来の認識に一石を投じることができた。「体育学研究」に掲載されたこの2編の論文は、「1.序論」で述べた中村・荒井・木内による大学体育授業研究プロジェクトの総決算的なものとして位置づけられる。また、大学体育授業が研究フィールドになることを多くの大学体育教員に意識づける契機となったと思われる。

#### 2) 大学体育授業研究に関する専門書を編著者として上梓

・橋本公雄・西田順一・木内敦詞・堤俊彦 編著(2021)自己成長をはかる大学体育：挑戦的課題達成型体育授業の理論と実際. 花書院.

私の博士の学位の主査であった橋本先生が主宰する大学体育授業研究グループのメンバーで、本書籍の編集・執筆を行った。この20年の中で、大学体育の授業研究は過去にないほどに活性化された。その中心がこの本を執筆した研究グループメンバーであったといえる。大学体育の授業研究をまとめた書籍は、これまでのところ2編のみで、ともに橋本先生が中心に編集されたものである。

### 3) 杏林書院「体育の科学」誌へ依頼原稿を掲載

・木内（2021）学生対象の調査データを活用したSoTLのススメ. 体育の科学, 71（6）：398-402.

・木内（2023）大学の体育実技から考える低頻度の運動の役割：コロナ禍から学ぶ大学体育の価値. 体育の科学, 73（8）：510-515.

体育スポーツ健康科学領域の専門商業誌「体育の科学」は、日本体育学会（現・日本体育・スポーツ・健康学会）編集協力のもと、杏林書院により発行される月刊誌である。編集委員グループにより月毎の特集が生まれ、そのテーマに関連した研究者に原稿依頼が行われる。その昔、「体育の科学」への執筆依頼が来ることを目標の1つにしていたので、大変光栄なことだと感じている。

### 3-5 獲得した研究資金

「3-2 研究の特徴」の項で示した授業研究で7件、部活研究で4件、生理学研究で2件、計13件の研究助成を得た。そのうち、研究代表

者として5件、研究分担者として8件であった（資料7）。

### 3-6 招待講演等

これまで招待講演を28件行ってきたが、その内訳は、大学体育関連26件、大学スポーツ関連2件と、ほとんどが大学体育授業の実践や研究に関するものであった（資料8）。

### 3-7 学生への研究指導

主に担当している大学体育スポーツ高度化共同専攻は、大学体育教員の養成と高度化を目的とした3年制博士課程であり、修士を持った現職の大学教員が学生の多くを占める。そのため、成人学習論・省察的学習論を専門とする三輪建二氏のいう対人関係専門職（看護職・教育職・福祉職など）の大学院生への指導理論（三輪, 2023）を援用している。すなわち、①自らの実践を省察する省察的実践者の側面、②自己決定性や経験の尊重を省察する成人学習者の側面、③対象者の学習支援を省察する学習支援者

資料7 獲得した研究資金

年度	研究課題名	助成	助成額
<b>【研究代表者】</b>			
1992	脱トレーニングが骨に及ぼす影響	科研費, 奨励研究A	800千円
1998-99	異なる強さの荷重負荷に対する骨の組織形態計測学的・生体力学的応答	科研費, 奨励研究A	2,000千円
2004	身体活動・運動・スポーツの実践を介した大学初年度教育としての健康管理学習プログラム の開発：体育版の宿題を用いた取り組み	全国大学体育連合・ 大学体育研究助成	100千円
2006-07	健康的なライフスタイル構築のための行動科学に基づく大学初年次体育授業の実践と 評価	科研費, 基盤研究C	3,200千円
2020-24	大学生アスリートのキャリア成熟に影響を及ぼす要因の抽出	科研費, 基盤研究C	4,290千円
<b>【研究分担者】</b>			
2010	大学生における課外活動とライフスキルの関係	全国大学体育連合・ 大学体育研究助成	100千円
2012-14	大学体育の分野別FDおよびプレFDプログラムの開発	科研費, 基盤研究C	4,550千円
2012-14	行動科学に基づく大学生の自己成長を促す独自の体育プログラムの開発と検証	科研費, 基盤研究B	17,680千円
2013	大学体育授業時間内における身体活動量を効果的に増大させる方法の開発と実践	全国大学体育連合・ 大学体育研究助成	100千円
2015	ライフスキル獲得を促すコーチングスキル尺度の開発	笹川スポーツ財団・ 研究助成	
2016	指導者のコーチングスキルが学生アスリートのライフスキル獲得に及ぼす影響：大学 サッカー競技者を対象とした検討	笹川スポーツ財団・ 研究助成	
2016-19	大学体育教員の授業力量を高める授業改善動画システムの開発	科研費, 基盤研究C	4,420千円
2016-18	行動理論に基づく大学生の自己成長を促す挑戦的課題達成型授業の開発とモデル構築	科研費, 基盤研究B	16,770千円

の側面，を重視した研究指導を行っている（本 AP 表紙の AP チャート参照）。現職の大学体育教員である大学院生が，自身の教員としての経験の中で感じてきた問題を解決し，実践に活か

せる研究課題となるように，そして学生自身の興味の本質を見極めるよう，面談を繰り返し行ってきた。また，疫学研究者の近藤克則氏の書籍「研究の育て方：ゴールとプロセスの「見

## 資料 8 招待講演題目

年月日	講演題目等
2009/3/8	初年次教育としての大学体育の可能性. 九州スポーツ心理学会第22回大会（シンポジウムII「大学体育を活用した健康づくり戦略とその可能性」）
2009/8/27	健康運動心理学に基づく大学体育授業. 日本体育学会第60回記念大会（体育心理学専門分科会シンポジウム「体育心理学の体育授業への貢献」）
2010/6/29	大学体育授業をフィールドとした教育実践研究の実際：初年次体育プロジェクト(FYPE), 筑波大学 Body and Mind Integrated Science (BAMIS) Project 第1回セミナー
2011/6/5	行動科学に基づく大学生の健康づくり. 大学教育学会第33回大会ラウンドテーブル（大学生の健康と活力, 社会性）
2011/12/14	大学体育授業をフィールドとした教育実践研究. 第5回大阪工業大学一般教育科研究談話会
2012/3/26	行動科学に基づく大学新入生の健康づくり介入研究：Project FYPE. 神戸大学発達科学部体育授業FD研修会
2012/9/6	健康行動科学を大学体育授業へ活かす. 第2回健康運動科学懇話会
2012/12/1	OIT style の大学体育. 全国大学体育連合近畿支部講演会
2013/9/15	OIT style の大学体育. 九州体育・スポーツ学会 第62回大会（トピックセッション：大学体育授業の実践例—種目「を」学ぶから、種目「で」学ぶへ—
2013/12/5	OIT style の大学教養体育論. 専修大学スポーツ研究所特別研究会
2013/12/7	OIT style の大学教養体育論. 全国大学体育連合近畿支部講演会
2013/12/21	教養体育の現状. 体育・スポーツ系の大学院生と修了者のための大学教員就職セミナー in Osaka
2014/1/25	教養体育の現状. 体育・スポーツ系の大学院生と修了者のための大学教員就職セミナー in Tokyo
2014/1/29	大学生の心身の健康と社会性を育む大学体育授業—OIT style の大学教養体育論—. 平成25年度 名桜大学FD研修会
2014/11/29	大学体育の論と証拠と満足度. 慶應義塾大学体育研究所・全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム（大学生をどう育てるか：教養体育からの発信）
2015/8/24	疫学研究フィールドとしての大学体育. 第1回日本スポーツ体育健康科学学術連合シンポジウム「スポーツ体育研究における疫学的研究手法の使い方」
2016/2/16	ワークブックを用いた大学体育授業の展開と成績評価. 日本体育学会東北地域FD「私立大学における体育実技指導プログラムと成績評価」
2016/9/22	大学体育をフィールドとした疫学研究. 第2回運動疫学の集い「疫学的手法の運動・スポーツ分野における応用」
2017/3/14	大学体育の価値と評価—体育実技授業の実践と効果—（健康・体力・技能向上を図る立場から）. 第5回大学体育研究フォーラム・平成28年度九州地区大学体育連合春季研修会
2018/3/4	大学体育授業の振り返りと改善のための実践. 第9回大学体育指導者養成研修会
2018/11/6	大学体育スポーツ学への招待. 鹿屋体育大学大学院特別講義
2019/7/30	大学体育の効果的循環モデル：論と証拠と満足度. 大阪大学全学教育推進機構 スポーツ・健康教育部門企画講演会
2019/9/13	課外活動を通じた学生の成長. 筑波大学令和元年度学生生活関係教職員研修会 4班「課外活動と全学的行事への学生支援の再考」
2019/12/14	大学体育の論と証拠と満足度を整える. 「身体教育再考」～大学における一般体育の在り方と今後の展望～. 日本大学文理学部体育学科, 2019年度特別シンポジウム
2021/1/20	大学におけるスポーツ実践教育による国際社会人基礎力養成への期待. 京都先端科学大学 2020年度 第9回FD・SD研修会
2021/9/8	わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積. 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会
2023/3/17	Learning outcomes through university physical education in the COVID-19 disaster in Japan. The 5th Research Forum on University Physical Education in East Asia
2023/8/30	高校大学期におけるスポーツとの関わり方：部長教員の視点から. 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会

える化」, 医学書院」をテキストに用いた演習授業を1年次春学期に開講し, 優れた研究が備える条件とはなにかを学ぶとともに, すぐに自身の博論研究計画へ適用することを授業内で検討し, 学生同士の意見交換の場としている。

修士課程の学生には, 博士論文よりも規模の小さなテーマとして, 学会誌へ1編の論文を投稿できるようなものを設定することを心がけている。テーマとしては, 卒論の精緻化を基本としながらも, 当該学生が持つ問題意識を掘り起こすための面談を繰り返し行い, 卒論に縛られない修論テーマ設定をめざしている。修士博士とともに大学院生とは, 年間を通じて少なくとも2週間に1度は, 1 on 1の対面またはオンラインの研究打ち合わせを継続的に行っている。

学士課程の学群生の卒論指導については, 所属する運動部の活動を研究対象としたテーマを, 当該学生との面談を繰り返す中で決定してきた。介入研究よりは観察研究を軸に無理なく, また, 扱うデータとしては量的および質的

なものを照らし合わせながら結論を導く混合研究方法を取り入れるよう努めている。そのほうが, 運動部活動をしている学部生が納得感を持って自身の研究を進められると考えるからである(資料9)。

#### 4. 管理運営・社会貢献

##### 4-1 サービス活動(管理運営・社会貢献)の理念

後掲する資料11のAPチャートに示すように, 「雑務上等!」マインドでサービス活動(管理運営・社会貢献)にあたることにしている。教育や研究で培った経験やスキルや感性を活かして, 雑務にいかに取り組みかは, 自身の生き方の表明の場と考えている。教育や研究という綺麗などころにしかエネルギーを注がない大学教員にはなりたくないし, サービス活動を協働して行うことで職場の同僚性が育まれるものだと感じている。

#### 資料9 研究指導した学位論文題目

論文題目	
博士	日本・韓国・台湾の大学における教養体育の教育システムに関する国際比較研究 自己開示経験によるライフスキル獲得を意図した大学体育授業の設計とその学修成果の検証 学修者本位の教育への転換が大学体育バドミントン授業の授業受講者の主観的恩恵に及ぼす効果 運動部活動と徳性の強みの関係性に関する基礎的研究 運動に対する情意形成と日常の身体活動促進をめざした大学体育一般体操授業の開発と効果検証 大学生の日常生活に定着する運動課題の開発に関する実践的研究
修士	学生アスリートのキャリア成熟に影響を及ぼす要因の検討 野球における捕手の配球戦術の実践知
学士	筑波大学硬式野球部のチームとしての成長プロセスに関する縦断的観察研究 大学野球部員のセルフマネジメントスキルとキャリア成熟に関する縦断的観察研究 大学野球部員のキャリア成熟と運動部活動経験の関係 日本人アスリート向け新旧心理尺度の比較研究 大学スポーツで獲得の期待されるコンピテンスと新旧アスリート心理尺度の関係 大学生アスリートに求められるコンピテンスとキャリア成熟の関係性 筑波大野球部広報局2022の組織評価：チームワーク特性に着目した混合研究 筑波大野球部過去10年(2013-2022)のチームスローガン評価：優れた組織づくりに向けた混合研究

## 4-2 学内委員会

- 1) 体育スポーツ局・体育部会（旧体育センター）・大学体育部門・正課体育委員長  
2020-2023

160超の共通体育授業の運営を統括する、体育科目のいわゆる教務委員長に相当する役回りである。コロナ禍のオンライン授業対応や非常勤講師対応が困難を極めたが、同僚教員や非常勤講師、そして事務局員のみなさんの協力のもと、4年間の任務をなんとか終了できた。

- 2) 体育スポーツ局・体育部会（旧体育センター）・大学体育部門長 2023～現在

4つの委員会（正課体育、体力・トレーニング、研究、FD・危機管理）からなる大学体育部門長として、旧体育センター（共通科目を主に担当する体育系教員により構成される教育センター）がそれぞれの機能を果たすよう運営している。

- 3) 体育系研究倫理委員会（2015-2018）：副委員長 2015、委員長 2016-17

130名規模の体育系教員からの研究倫理申請書類の審査を毎月行う委員会である。倫理申請書類の審査にとどまらず、研究倫理研修会などを通じた教員への研究倫理教育、さらに倫理申請書類の改訂など、委員長を務めた2年間はほぼ毎日が当委員会業務に追われ、事実上、教育と研究に大きな支障を来た。とはいえ、力不足ながらも雑務上等マインドのもと、委員長業務を2年間勤め上げたことで、同僚教員から認められたような気もする。また、この期間には特に多くの先生方や大学院生との接点を持つことができ、筑波大学体育系への自身の適応に寄与した業務であったと、今となっては意味づけている。

## 4-3 大学連携

筑波大と鹿屋体育大による「大学体育スポーツ高度化共同専攻」の開設および運営に、深く関わってきた。大学体育スポーツの充実のため、教育指導と研究の循環を高度に展開できる

能力育成を軸とした教育指向型の3年制博士課程である。2014年に筑波大教授として採用された後、当専攻開設へ向けた準備を行い、2016年に開設。今年で9年目を迎えた。完成年度から6年で、共同専攻全体として19名に博士（体育スポーツ学）を授与し（筑波大本籍13名、鹿屋体育大本籍6名）。そのうち、6名の主査を務めた。

## 4-4 若手教員の指導

前項4-3で述べた筑波大と鹿屋体育大の「大学体育スポーツ高度化共同専攻」の学生として、筑波大体育系の同僚教員がこれまで4名入学している。開講科目の1つである「大学体育授業演習」は、本専攻の指導教員が担当する共通体育授業を学期を通じて参観し、授業の優れている点や改善すべき点をコメントレポートすることとしている。私の共通体育ソフトボール授業を参観した大学院生によるレポートでは、以下のことがコメントされていた。【優れている点】初回授業における成績評価指標の具体的な提示説明、運動課題実践の際の用具の創意・工夫、技能水準に配慮した班編成、雨天時体育館内における多様なドリル編成。【改善が求められる点】整理運動の不実施、ヒヤリハット場面（施設破損の危険）体育館での練習時、ヒヤリハット場面（受講者の受傷の危険）バットスイング時、キャッチボール時。

以上をまとめると、私の授業は学生の動機づけを高めるための工夫は十分に行われている一方で、体育授業の大前提となる安全面への配慮が不足している状態であることがわかった。若手教員への指導どころか、若手からのありがたい指導をいただいた重要な機会であった。秋学期からの授業では、安全管理を授業の最重要課題とする。

## 4-5 学会等における活動

大学体育に関するFD活動や学術活動を推進する（公社）全国大学体育連合（大体連）にお

ける常務理事・研究部長として、さらにその論文誌「大学体育スポーツ学研究」の編集、学術大会「大学体育スポーツ研究フォーラム」の運営が、現在の中心的な社会貢献活動といえる(資料10)。大体連は2019年に、日本学術会議協力学術研究団体に指定されている。

日本スポーツ体育健康科学学術連合は、日本学術会議の中の「体育学・スポーツ科学」, 「体力科学」, 「予防医学」の3つの分野の学術団体が中心となって、この分野の研究の発展と研究成果の社会への還元を目的として結成された学術連合である。2021年より、本連合の運営委員会監事として委員会の議決や業務遂行の監査を行っている。

他には、筑波大学野球部が所属する(一財)首都大学野球連盟の理事として、法人化移行や規約検討に関与してきたことが主な事項である。

#### 4-6 硬式野球部との関わり

筑波大学へ移動した1年後の2015年から部長を務めている。筑波大野球部のOBである私にとって、母校野球部の部長を務めることは、実は長年の夢であった。部長は、野球の現

場指導を行う立場ではない。監督の先生にしかできない雑務は監督の先生にお願いするしかないが、それ以外の顧問教員で事足る雑務は私に持ってくるよう、マネージャーに指示している。トレーニング場利用の際の開錠施錠を含めた帯同(コロナ禍の2020年以降)や、リーグ戦への帯同を、可能な範囲で、副部長の先生と分担して行っている。その他、新入生の個人面談や、上級生の就職支援として各業界OBへの連絡を取り継ぐ場面もある。

OB会事務局長も2016年から兼務している。千名を超えるOB会員の会費徴収システムを新規に導入し、会費納入率向上には貢献した。また、毎年11月実施のOB総会&Baseballセミナーは、全国各地を巡回して開催するため、その都度、幹事を務めていただくOB諸氏と連携をとり、円滑な運営に務めている。

#### 5. 理念の統合

私が教育—研究—サービス活動によって実現したいのは「大学体育スポーツ学の体系化」であることを、APチャート作成によって整理できた(資料11)。大学体育スポーツ学の体系化

資料10 学会等における活動

組織等	役職等	年度	内容
(公社) 全国大学体育連合	総務部委員	2014-2016	連合運営の総務全般
	常務理事	2015-現在	連合運営の意思決定
	研究部長	2019-現在	連合の行う学術活動の統括
「大学体育スポーツ学研究」	編集委員	2011-現在	論文誌の査読および編集
	編集委員長	2015-2019	論文誌の編集の統括
	編集幹事	2020-現在	論文誌編集委員長活動の補佐
「大学体育スポーツ研究フォーラム」	運営委員	2015-現在	フォーラムの企画運営
	運営幹事	2020-現在	フォーラム運営委員長活動の補佐
日本スポーツ体育健康科学学術連合	運営委員会 監事	2021-現在	運営委員会の議決や業務遂行の監査
(一財) 首都大学野球連盟	評議員	2015-2022	連盟理事の職務の監督
	理事	2018-現在	連盟の公正な運営業務の遂行
(一社) 日本体力医学会	評議員	1999-現在	学会理事の職務の監督
「スポーツパフォーマンス研究」	編集委員	2016-2022	論文誌の査読および編集
「大学教育学会誌」	編集委員	2020-2022	論文誌の査読および編集

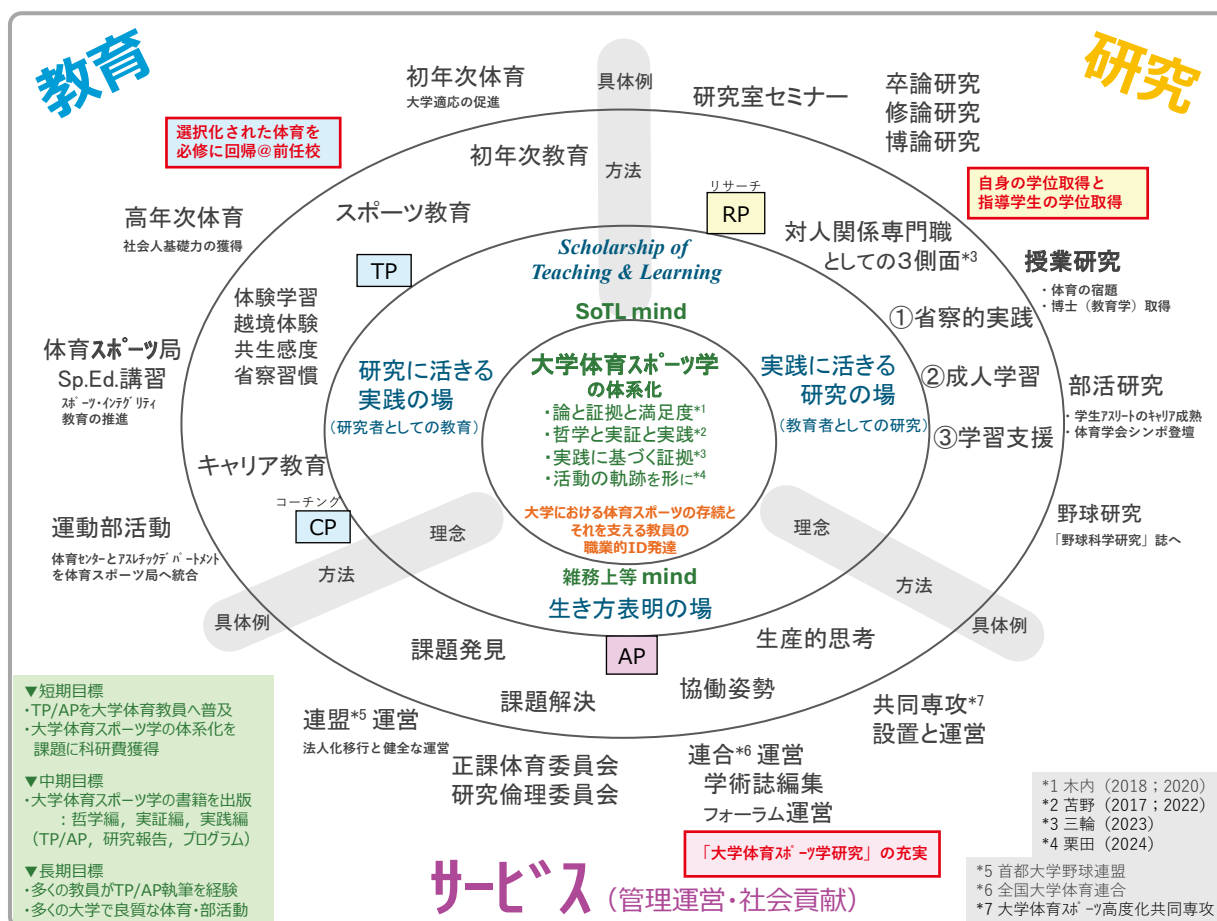
とは、①大学体育の論と証拠と満足度（木内，2018；2020）を整えること，あるいは，②教育の哲学と実証と実践（苫野，2017；2022）を大学体育スポーツにおいて実現すること，である。大学で体育授業や運動部活動を行う意味や意義や理屈を各教員が深く考え論じ（論，哲学），その学修成果を様々な角度からの証拠から実証し（証拠，実証），学生の自己成長感ある体育授業や部活動を効果的に実践すること（満足度，実践）を，「大学体育スポーツ学の体系化」と呼ぶこととする。これは，体育やスポーツが高等教育の一角として将来にわたって堅固に位置づいていくための前提となるだろう。そのためには，対人関係専門職の1つである教員の私たちが，実践に基づくエビデンス（三輪，2023）の構築を，TPやAPのように「活動の軌跡を価値あるカタチに（栗田，2024）」する

活動が重要な役割を果たすと考えられる。TPやAPの執筆経験が，大学体育スポーツを支える教員・指導者の職業的アイデンティティ（ID）発達を促し，良質な大学体育授業，大学スポーツへの発展，さらには大学組織構成員のウェルビーイングの高まりに繋がると思われる。

私の教育の理念は「研究に生きる実践の場」とすること，研究の理念は「実践に生きる研究の場」とすることであり，SoTLの概念が教育と研究をつなぐ理念として非常にマッチする。研究者として教育を行い，教育者として研究を行う，いわば SoTL マインドが私の教育と研究を結びつけている。これは，大学体育授業の実践研究で博士の学位を取得したことや，受賞内容や招待講演の大半が大学体育授業研究に関するものであることから裏づけられる。

次に，教育と研究がサービス活動とどのよう

資料 11 教育—研究—サービス活動の理念の統合を示す AP チャート



に紐づいているのかを整理したい。私の場合、大学体育授業を担当するいわば「業務」を研究対象とした実践研究で学位を取得し、そのことが大学体育スポーツに関するFD活動や学術活動を推進する全国大学体育連合のミッションに貢献することとなり、それが転じて大学体育スポーツ高度化共同専攻という大学体育教員の養成と高度化を行う博士課程開設のための教員採用に繋がった。そして今では、大学体育スポーツの優れた実践に寄与する実践研究を軸とした博士論文研究の指導を行い、大学体育スポーツ学とでもいふべき領域を構築しようとしている。私のような教育と研究とサービスの統合が自然に行える環境は、おそらく稀ではないだろうか。日本全国の大学体育教員の多くは、自己の研究領域や競技種目とは異なるものを授業で担当し、それとはかけ離れた研究テーマに取り組んだり、運動部活動の指導にあたりたりしている。教育と研究とサービスの循環と統合を無理なく行える私の今の環境は、幸せの極みともいえそうである。

## 6. 専門的な成果

これまでの大学体育教員としての活動を振り返り、特に誇れる専門的な成果と考えられるものを、教育、研究、サービスに関して各々1つずつ挙げる。

### 6-1 【教育】 前任校で選択化された共通体育科目を必修科目に回帰できたこと

前任校の大阪工業大学では、1994年に体育授業が選択化された。当初は語学、人文社会、体育から一定の単位取得が求められる選択必修科目として位置づけられ、95%以上の新入生が体育を1年間は履修する時期が長く続いたが、ある時期からは半期のみとなり非常勤講師の削減など体育授業の運営が困難を極めた。新学部設置にともない上司教員が移籍したり転業したりする中、当時の若手教員で結成した大学体育授業研究プロジェクトチームの活動が学内

外で広く認められた。その結果、体育選択化から20年を経て、2014年に1年次前後期を通じた体育必修に回帰することができた。2年次以降は従来どおり選択科目として継続して開講されている。これら一連の活動報告を、日本大学スポーツ科学部での招待講演で行い、その内容を桜門体育学研究に掲載している（木内、2020b）。現・大阪工業大学・中村友浩教授、現・法政大学・荒井弘和教授との中村N・荒井A・木内Qによる授業研究打合せ（NAQミーティング）を行った時期（2003-2006）は、今の私の原点ともいえる貴重な4年間であり、大きな転機であった。

### 6-2 【研究】 自身の博士号取得と、指導学生の博士号取得

その荒井先生の専門とされるスポーツ心理学・健康心理学関係の繋がりで知り合った方々の中でも、橋本公雄先生（当時、九州大学教授）との出会いは私の人生の転機となった。大阪工大で中村先生と荒井先生と3人で大学体育授業研究に精力を傾けるもっと昔から、大学体育授業を対象に体育心理学の観点から研究を続けてこられたのが橋本先生である。九州地区は今もなお大学体育授業研究が盛んな風土があり、それを作り上げたのも橋本先生である。そんな橋本先生のご指導のもと、大工大での教育実践研究を軸に博士論文を仕上げ、博士（教育学）を取得できたことは、私の生涯の中でも筆頭の成果といえる。私よりも20歳ほど年上の橋本先生は今もなお研究活動や社会貢献活動を継続されており、活力ある生活を送られている。橋本先生、中村先生、荒井先生は、私の生涯の師である。

筑波大学へ異動後は私自身が博士課程の大学院生の研究指導を行える立場となった。これまで6名が博士（体育スポーツ学）の学位を取得したことも、私自身の学位取得と並んで専門的な成果といえる。次世代の大学体育スポーツを担う人材を自分の手で育てることができることは、何よりの喜びであり、生き甲斐である。前

任校ではもっぱら共通科目体育の授業担当のみであった私が、卒論、修論、博論の指導ができるようになったことは、学位を取得する前の私には想像がつかなかった。2つ目の大きな転機であった。

### 6-3 【サービス】論文誌「大学体育スポーツ学研究」の活性化

大体連発行の論文誌「大学体育学（2004-2018）」の編集委員を2011年から拝命し、2015～2019の5年間、編集委員長を務めた。委員長就任後、最初に取りかかったのは、査読システムの改善であった。掲載論文の質を底上げするためには、豊富な研究実績を持つ、実践研究に理解ある研究者による査読と、投稿者との丁寧なやりとりだと考えたからであった。2019年には日本学術会議協力学術研究団体の指定を受けたことで、大体連は名実ともに学術団体としても認められた公益社団法人となった。これにより、各大学の学位論文審査や教員としての昇任審査の業績に、「大学体育学」を掲載できるようになり、フォーラムへの出張旅費支給も各大学で認められることになった。さらにそのタイミングに合わせて、論文誌を「大学体育スポーツ学研究」へ、フォーラムを「大学体育スポーツ研究フォーラム」へ名称変更した。これには、大学体育授業だけでなく、近年注目の高まる大学スポーツに関する実践研究を求める意思を示す意味も含んでいた。

「大学スポーツ学研究17号」を2020年3月に発行したのち、それまで副委員長としてサポートいただいていた近畿大学の西田順一先生に、編集委員長をバトンタッチした。今回、APワークショップと同時進行のTPワークショップへ参加されている難波先生と、帝京平成大学の園部豊先生に副委員長をお願いしている。私は編集委員長と副委員長を支える立場の編集幹事として、現在も本誌編集に携わっている。西田先生は委員長着任後、担当編集委員制の導入、特集「新型コロナウイルスに挑む大学体育」の企

画、優秀論文賞の選考経過と講評の巻末掲載、フォーラムでの優秀論文賞の受賞講演企画、論文ページデザインの刷新、そしてオンラインジャーナルの印刷冊子体のオンライン販売など、新しい発想のもと、高い行動力とリーダーシップで、本誌の水準と活性度を高めてくれている。

今の私にとって、この「大学体育スポーツ学研究」の編集に携わることが、教育—研究—社会貢献を目に見える形で繋ぐ手段であり、統合の成果ともいえる。また、編集幹事グループのメンバーは研究仲間であり、同志であり、相互に信頼できる繋がりを維持できていることは、何よりも大きな励みとなっている。

## 7. 大学教員としての目標

### 7-1 大学体育教員へのTPおよびAPの普及

大学体育の領域で以前から課題として挙げられているのが、「優れた実践に関する情報集積」である（木内，2021a；2023）。優れた指導実践を名人芸として風化させるのではなく、TPやAPを書き残すこと、そしてそれを公開すること、継続することで、教育や指導の質が改善されていくと思われる。大学体育や大学スポーツの領域へTPやAPを普及させていくことが、上記の「大学体育スポーツ学の体系化」へ繋がると考えている。学問としての教育学の体系化を推進する教育哲学者・苫野一徳氏（2017，2022）の言葉を借りて大学体育にあてはめると、次のようになる。「よい大学体育とは何か、それはどうあればよいといいうるかという哲学的な探究を土台に、そのような大学体育はいかに可能かを実証的、また実践的に探求していくこと」が望まれる。その蓄積（大学体育の教育学としての体系化）が大学体育の必修／選択の別や開講年次／年数に反映されると信じて継続していくことが、大学体育に関わる教員の責務だと思われる（木内，2023）。そのため土台づくりは、TP/APの普及にかかっている。2020年以降、TP関連の報告を筑波大学体育センター紀要「大学体育研究」へ掲載して

いる。大学体育スポーツ高度化共同専攻の必修科目「大学体育論」において、TP チャートとティーチング・ステートメントをセットにした簡易版TPの作成を、授業の到達点として設定した。その原稿を、「大学体育研究」で報告掲載してもらうことにしている。

## 7-2 大学体育スポーツ学の体系化の課題で科研費獲得

再び苦野（2017, 2022）の言葉を借りて大学体育にあてはめると、「大学体育の哲学と実証と実践」、あるいは「大学体育の論と証拠と満足度（木内, 2018; 2020b）」が、絶えず相互に関連し支え合う必要がある。これら一連の流れを、「大学体育スポーツ学の体系化」と表現することができる。どのような体育授業や運動部活動がよいと考えられるのか、大学で体育授業が開講されたり運動部活動が盛んに行われることをどのように意味づけるのか、といった「哲学的」研究を、TP や AP を大学体育教員や部活動指導者へ執筆してもらうことで広めていきたい。このことは、大学体育や大学スポーツに関わる教員や指導者の職業的 ID の発達にも寄与し得る。TP だけでなく AP に取り組むことで、教育—研究—サービスの統合をはかり、自身の生き方に自覚的になれると考えられるからである。

「実証的」研究は、「大学体育スポーツ学研究」を軸としながら、「体育学研究」なども含めて、大学体育および大学スポーツの実践研究を通して得られた成果を、総説としてしっかりまとめるべき時期に来ているように思う。大学体育が国内で広く実施されている東アジア諸国(中国, 韓国, 台湾)ですら大学体育スポーツに関する「大学体育スポーツ学研究」のような専門誌は存在せず、他国について調べても同様であった。

「実践的」研究も、疎かにできない。学術誌ではどうしてもプログラムの効果検証を軸とした内容になりがちである。そこで、体育授業や運動部活動の内容そのものを詳細に示したプログラム集のような情報が必要と思われる。学術

誌の原著ではない資料や報告として、あるいは紀要へ、大学体育授業や大学スポーツの実践内容、指導内容そのものを記録した情報の開示が望まれる。

以上のように、大学体育スポーツ学の体系化の課題で科研費を獲得し、研究を推進していきたい。

## 7-3 大学体育スポーツ学の書籍出版

前項で述べた大学体育スポーツ学の体系化を課題に科研研究を進め、その成果を書籍として出版することをめざす。苦野（2017, 2022）の理論を援用し、「哲学編」、「実証編」、「実践編」からなる三部構成とする。「哲学編」には、大学体育教員による TP や AP を、大学スポーツ指導者にはコーチング・ポートフォリオ（CP）を掲載してもらうことを想定している。東京都市大学が教員に推奨しているティーチング・ステートメント（東京都市大学 FD 推進センター, 2020）に加えて TP チャートも添えて、多くの教員／指導者の理念を閲覧できるものになりたい。「実証編」には、大学体育スポーツ学研究を軸とした総説論文を、「大学体育スポーツ学研究」の編集幹事グループのメンバーで協働して取りまとめたい。「実践編」では、シラバスだけでは語れない、体育授業の教場設定（グラウンド・レイアウト）のイラストなども取り入れ、各教員が何を考えて体育授業を運営しているのかが具体的にイメージできるようなプログラム集をめざしている。

## おわりに

大学教員の中でも体育教員は、自身が学生時代から継続してきた運動部活動の指導に関わる場合が多く、その位置づけが教育、研究、サービス（管理運営・社会貢献）のいずれに該当するかは、個人で異なる。著者は野球部の部長であり現場で指導を直接行う立場にはないが、監督やコーチとして大学スポーツの現場で直接指導を日々行う大学体育教員にとって、AP 作成

## 資料12 修了証



はより大きな意味を持つ。自身の教育—研究—サービスに共通したコアの部分（教育理念、コーチング理念）を探り、それに自覚的なことは、コーチングの質をより高めることに寄与するに違いない。また、教育—研究—サービスといった大学教員としての活動バランスをを整える上でも、全国の大学体育教員のみなさんにAP執筆を推奨する。

### 付記

第24回大阪公立大学高専アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ（2024年9月10日～12日）において、北野健一先生をはじめとする大阪公立大高専ティーチング・ポートフォリオ研究会の先生方、スーパーバイザーの竹元仁美先生（令和健康科学大）、そして私のメンターを務めてくださった金田忠裕先生（大阪公立大高専）より、細やかな温かいサポートをいただきました。心よりお礼申し上げますとともに、感謝の意を込めて、修了証を掲載させていただきます（資料12）。

### 文献リスト

- 相川 充, 高本真寛, 杉森伸吉, 古谷 真, 個人のチームワーク能力を測定する尺度の開発と妥当性の検討. 社会心理学研究, 27, 139-150, 2012.
- 木内敦詞, 大学体育授業の振り返りと改善のための実践: 論と証拠と満足度を支えるリフレクション. 大学体育, 45 (1), 55-58, 2018.
- 木内敦詞, ライフスキル獲得に関連する授業内の経験を振り返る大学体育ソフトボール授業: 自己開示, 他者協力, 挑戦達成, 楽しさ実感に着目して. 大学体育研究, 42, 3-14, 2020a.
- 木内敦詞, 大学体育の論と証拠と満足度を整える. 桜門体育学研究, 55, 103-106, 2020b.
- 木内敦詞, 学生対象の調査データを活用したSoTLのススメ. 体育の科学, 71 (6), 398-402, 2021a.
- 木内敦詞, ティーチング・ポートフォリオ・チャートの大学体育への適用: 教職歴30年の大学教員の事例報告. 大学体育研究,

- 43, 137-144, 2021b.
- 木内敦詞, 大学の実技科目から考える低頻度の運動の役割: コロナ禍から学ぶ大学体育の価値. 体育の科学, 73 (8), 510-515, 2023.
- 木内敦詞, 誰もが全力で接戦を楽しむ大学体育ソフトボール授業の教育実践記録. 大学体育研究, 46, 1-16, 2024.
- 栗田佳代子, <https://kayokokurita.info> (参照日 2024年12月5日)
- 松下佳代, FD ネットワーク形成の理念と方法—相互FDとSOTL. 京都大学高等教育研究センター編「大学体育のネットワークを創る—FDの明日へ—」, 東信堂. pp.44-67, 2011.
- 三輪建二, わかりやすい省察的实践: 実践・学び・研究をつなぐために. 医学書院, 2023.
- 西田順一, 橋本公雄, 木内敦詞, 堤 俊彦, 山本浩二, 谷本英彰, 体育授業における大学生の主観的恩恵およびその大学適応感に及ぼす影響性. 体育学研究, 61, 537-554, 2016.
- 旺文社, 私たちのカラダは運動によってどう変わるのか. 特集・大学びっくり研究. 運動生理学のススミぐあい. 旺文社受験情報誌 WING, 1984.
- 大山真紀子, 根岸千悠, 佐藤浩章, SoTLに基づいた教育実践研究計画を作成するプレFDプログラムの試行と評価. 日本教育工学会論文誌, 41 (suppl), 225-228, 2017.
- 島本好平, 石井源信, 体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響. スポーツ心理学研究, 34 (1), 1-11, 2017.
- 東京都市大学FD推進センター, ティーチング・ポートフォリオ成果報告書, 2020. <https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf> (参照日 2024年12月5日)
- 苦野一徳, 教育学のメタ理論体系. 本質学研究, 4, 1-17, 2017.
- 苦野一徳, 学問としての教育学. 日本評論社, 2022.